



校
報

けむやま

矢巾町立煙山小学校
H30.1.18(木) 第17号
紫波郡矢巾町北矢幅 1-2
Tel.697-3163

戊戌(つちのえいぬ) 2018年 変化の年

〈始業式の言葉〉

明けましておめでとうございます。

三学期は一年のしめくりです。次の学年に向けて頑張っていきましょう。

さて、今年の干支は“いぬ”です。日本では犬という動物をあてています。12年に一度巡ってくる干支ですが、もっと詳しく言うと本当は60年に一回巡ってくる数え方(十二支十干)があります。それでいうと、今年は、“戊戌(つちのえいぬ)”といます。ちなみに、甲子園の“甲子”は「きのえね」。子は“ねすみ”。甲子園球場は1924年、今から94年前の“ねすみ年”にできたのでこの球場の名前がつけました。

さて、この年がどんな年になるかを占う、今年の運勢というのがあります。この運勢を占うには、十二支十干で数えた60年前の出来事を参考にすることがあります。

今からちょうど60年前、昭和33年、1958年にタイムスリップ!

国立競技場

1964年の東京オリンピックのために国立競技場を造ったのが今から60年前の1958年。現在、2020年の東京オリンピックに向けて新しい国立競技場を造っていますね。

天皇陛下が婚約

今の天皇陛下が婚約したのが1958年。今年、孫にあたる眞子様が婚約の時期になっています。

また、国民の生活も変わり始めました。

インスタントラーメン

軽自動車 フラフープ

1万円札



東京タワー
(ラジオから
テレビの時代へ)

が登場。



実はこれらのことから、共通して言えることがあるようです。

新しいものに変わる。「**変化**」というキーワードです。

今までになかったこと、できなかったことに思い切って挑戦し自分をつくり変えていく、それに**適した年**であるということです。

「戌と戌」、どこか似ています。「戌」は「戌」に「-」が欠けています。実は「戌」も「戌」も「茂」から成り立っているのです。樹木は日光が当たらないと良く育ちません。果樹などを育てている農家の皆さんは、これから2月にかけて、剪定という仕事が始まります。この時期に、思い切って枝を切らないといけないというのです。

成長のためには、変化のためには**勇氣**と**思い切り**が必要です。失敗大いに結構。今年は、自分の殻をかなぐり捨てて、自分を変えるには**絶好のチャンス**の年。

変化は英語でチェンジ“Change”。チャンスは“Chance”。gとcが変わっただけで意味がまったく変わります。ちょっとした変化の積み重ねが大きな変化、成長につながる年です。60年に一度巡ってくる変化を応援するまたとない年。今までよりよくなるろうという**意気込み**で頑張ってください。

高め合おう
礼節を重んじ美しく

おめでとう さん

～前号の続き～

致知出版社のホームページを開いたら、「心に響く小さな5つの物語」の読書感想文コンクールの記事が掲載されていました。

全国小中学校349作品の中からの銅賞です。金賞と銀賞は中学生です。

全文と講評が掲載されていたので、紹介します。なお、講評の皆藤章氏は、全国的に著名な心理学者です。

銅賞 さん

(矢巾町立煙山小学校6年・岩手県)

私は『心に響く小さな5つの物語Ⅱ』を読んで、こう思った。人間には、生きる力がある。でも、それをかくしながら生きているんだと。第一話の中に、脳性マヒになった方、木村さんの、「脳性マヒにかかったおかげさまで、生きるということが、どんなに素晴らしいことかを、知らしていただきました」という言葉がある。それを聞いて、何も知らない人は、病気にかからないのがふつうだと思っていたと私は思った。生きていることが、どんなに幸せなことなのか分かった。

第二話の中に出てくる皮膚病の男の人、しらくもとよばれていた人、みじめで辛かった時代。我が子にはこんな思いはさせまいと望んだ。だが勉強は、してくれない子にさせるなら、先に自分がしようと思った男性は、ある本を読んだ。「ジャン・クリストフ」という人物が出てくる。ジャンは、どんなに苦しくても、はい上がってくる。男性は自分もこのように生きていこうと思った。どんなに昔が苦しくても、どんなにだめでも、今できれば、昔のことなど、どうでもいいと思えたのではないかと考えた。

第四話の中では、男の子が出てくる。学校には、貧しかったため、行けなかった。二十代になったころ、恋人の死という悲運に見舞われ、神経衰弱を患う。でもその中、弁護士の資格を取り選挙に四度出たが落選した。でも、夢と志が逃げることを許さなかった。そうして、大統領の座を射止めたその時は五十一歳だった。その男性の名は、エイブラハム・リンカーンで、有名な大統

領の名だった。夢と志に向かっていく者たちに、天は試練を与え試している。でも、私はそんなことはない。必ずしも、試練が、みんな同じとはかぎらない。自分は、自分なりの、その人は、その人なりの試練がある。だから、自分のほうがつらいと思っても、その人は、つらいと思っているかもしれないと思うと、試練とは、一人一人の困難が、きっとやってくると思った。

この本を読んで、改めて思った。人間には生きる力があるのだと。その力を出して、しょうがいを終える人と、力を出さないで、しょうがいを終える人とは、ちがいが出る。その力を出すには、生きることの大切さを知るということ。また今を大切に、この平和にくらせていることが奇跡なのではと思うくらいの本だった。

◆講評(皆藤章氏…京都大学大学院教授)

この感想文の主軸は、病気や貧困といった人生の悲観性が「生きる」体験を通して幸福感へと転換していくところにあります。内山綾菜さんはまず、「脳性マヒにかかったおかげさまで、生きるということが、どんなに素晴らしいことかを、知らしていただきました」との文を引いて、生きていることそれ自体の幸せを語っています。随筆家の岡部伊都子は「自分が学歴はないが病歴がある」と語っていますが、この語りには鶴見俊輔が、病歴は学歴を超える力をもっているとして、病床での自己内対話が人間の精神を築いていくことを指摘したことを想起させます。ただ、惜しむらくは、生きていることはたしかに幸せなのですが、その覚知に到るまでのひとの生きる在りようについて、自身の人生(生活・暮らし)との「映し合わせ」から語ってほしかったという点です。この点を、内山綾菜さんは「試練」についての感想で考えています。「私はそんなことはない。必ずしも、試練が、みんな同じとはかぎらない。自分は、自分なりの、その人は、その人なりの試練がある。」と、非常に重要な覚知を語っています。ここに内山綾菜さんが描く人間らしさが生きていると思えました。こうした感想を自己内対話しながら綴り、最後に「今を大切に、この平和にくらせていることが奇跡なのではと思うくらいの本だった」と締めくくっています。小学六年生の感想文としては秀逸だと思いました。